



### 近代化への努力

南 知 春

世に所謂「コソクリ」ナンなる存在を自認する人が多し。私の下宿の人は皆そうだ。良く當ると言ふ。彼女は大年は嫌うと言ふ。私は世にこんな馬鹿氣な非科學的な事は無いと否定するが、相手は「私も初めは、そんなものはないと否定して居たのだが、實際やつて見て全面的な否定も出来ない」と言う。私は其處で一席辯す。『かゝる考へは封建的無知盲昧な人の信ずる事、いやしくも近代人間は笑止な事だ』とする。第一科學的に證明出来ないではないか。阿呆らしい。私は、効目はない事は斷言出来る。が貴方は信するが故に魔術に於けるのであろう。だが合理的な心理的束縛を心中に留めて置くだけなら良いけれど、それを實際的生活に應用しようとする。即ち病氣になつた。それ家相が悪い?の神がたつたのと、この様な事が未だ数多くの民衆の中に力強く働いて居り、近代人間の育成に重大な支障となり、又これの「たたり」を恐れて、古からの習慣に改革を加える事を嫌ひ、古い儀式を「傳統の神聖化」として尙、合理的封建制があり、合理的、理論的の樹立を必要とし、人間の、主體的面の明瞭性を確立しなければならぬ事は、肯定されよう」と。こう言つた所で、信者は眞に受けない。「だが事實経験からさうなんだから」と經驗主義者になつて、未經験と言ふよりは全面的に否定の立場な私に應酬する。余りにも藥の効き過ぎた經驗主義者では單なる事柄の、事實の私的な反覆を貴方が見出し、それを基として、それに批判に依つて居るからだ」とかゝる論旨の根本は何處に在るか? 私は、古アジヤ的な社會機構、乃至精神にあると思ふ。即ち合理的性格を持つ西洋文化に比し、東洋文化は理を重んずるよりも、事を重んずる事實主義的精神の在る事に注意すべきである。それは行動的理想の典型と歴史的事實を見出し「事實そのもの」をその獨自な相に於てその所を得た形に於て「見よとするものであり、思考が分析的、綜合的でなく、全體的直観的である。これは細分(純粹性への)を嫌うが故に、近代の合理主義を代表する科學と技術の發展が通れた結果となつたのである。この事實的精神は、理を持つて解し得ない世界で、論理否定し、それを超越して把握し、即ち科學的認識に欠ける結果となる。この点については、多分に宗教的影響がある事と思ふのである。以上で迷信が無學の未啓蒙に在るとは言え、その由來する歴史の根據は東洋の古代社會と精神とに在る事が分るが、我々には、傳統的迷信「魔術」を科學的合理的の冷感な批判の前に「終末」を告げしめ我國の民主的再建の基礎的必須先提としての「近代人間」の育成に邁進すべきである。(七高三年生)

### 音楽部の近況

ヴォート教育課長は視察の折「日本に來て始めてこんな立派な音楽を聞いた。」と稱賛し自らの指揮台に立ち「本國から樂譜を取寄せて送る」との約束迄結んで行かれた。菊の花香る廿三年九月北校舎末端の教室に部員十余名が全身備だらけの痛々しいピアノを圍んで思案に暮れながら三越き上つてから一年三月、實際活動は創立

田篠崎兩君は金策に奔走我々にはあわれとも尊敬ともつかぬ感で感謝して一杯だつた。第二講堂で的高校連合音楽會には、SHアンサンブルと命打つて堂々演奏しは拍子も鳴り止まらな程で稱賛の的となり、十二月七日にヴォート氏の招待で一二部音楽部員八十名が數百名の參集する小學校講堂で合唱や演奏をやり大いで唱へた。ヴォート氏とジープと「戦争の犠牲者」と呼ばれるべき悲況に

### 對校會雜誌記

去る十二月二十八日、ふむ砂利と銀杏落葉の薩摩湯田に於て大口高朝の講校會が行はれた。本寒風について會場を念校は寺田先生若松先生いた。十一時過ぎ兼題を始め川内俳句會の人の選を開始した。本校選を含めて一行三十餘の主な作品を拾つて名。朝一番の汽車で湯田に到着。

尖塔の十字架をまき刑を鞠く  
新張の星塵をまき刑を鞠く  
冬晴れ風吹き上る岩岩台地  
舟の水平線に海に秋ふかし  
秋日和雨のからす舞にあま  
おそ秋や緑茶の香をなで  
落葉たか翁にも、斜陽かな  
鶴の影に釣る面上にけり  
しみ出で石原原切り秋の水  
みさ、きは朝霧みちで洗灯のみ  
風葉く落葉みちたる、秋は来りぬ  
栗穂並頭並べて金ぐ子等  
冬の海通ひの船は今日も出す  
初しぐれ蓮の取葉に玉翠  
引れ下敷をかへしや秋の暮  
引き水にのりて紅葉の矢の如く  
月出でて端居も長くなりけり  
障子洗う水輪は流る、紅葉まで  
又吟行選句では  
日の光り虚しと思ふ紅葉掌に  
船おせば湧き来る底の落葉かな  
冬ざれやカマクラに声の定まらず  
山峡の水の深みか散る紅葉  
改札の野菊深きあり山の驛  
老婦の閉ぢし延の干甘藷  
盛り返す夕の青さや多日和  
秋淵の波輪はつぎす底までも  
秋風の水漬きたりに木の葉落つ  
水底に紅葉落葉の色あせり  
冬河原聲はがらかに語り合う  
概して總得点に於ても、が當日我々を指導して川高の方が優勢であつた。下さつた先生及び俳句た。後になつて失禮だ。會の人の作品を拾つて

- 俳句
- ハモニカを吹く子牛車に秋目降る  
白菊を手向けて仰ぐ暁の月  
障子洗う手洗つめたく水湧ける  
書をめぐる指のつめたき夜寒かな  
炎火して頬美しくなりけり  
雨垂れの音かすかなり多ざる  
朝霧のうすれ泊舟さだまりぬ  
青白き月さす藪やけらのなく  
柿一つ残れる幹に多近し  
初時雨砂山去りて浅き溝  
山峡に秋陽の落ちて皆紅  
行商や沛雨の路を徒跣し  
朝露の畦草に点々とぬるる下駄
- 短歌
- 棕櫚竹の露降りてぼす朝風の  
すがしさに居て髪結ひにけり  
朗詠の聲もくづさす我が母は  
百人一首よみあげ給う  
朝まだき温泉に小さき身を沈め  
幼き記憶ふとよみかへりぬ
- 詩大島
- 鹿のいると云はれるこの島  
濱砂つゞきにほ白き貝がらの  
波に洗はれ  
たくましく松の木立の蔭をなすもと  
うす紫の小さき花一面に咲き  
するどくたちたる岩のつゞきに  
かすかに香ふ磯の香  
眞青き波間に初日輝き漁舟のたゞよひ  
赤銅の男の海中へめぐり  
いせび、あわび、ささえ、うにをとる  
阿久根の寶庫  
そして天然の美しき島大島
- 俳句
- 流合正道  
大山 徳  
増田孝雄  
上水流邦範  
山和  
黒松子仲  
吉永哀子  
家村康一  
二之形智子  
川添洋子  
加藤寛之  
楠本豊晴  
小島 優
- 田中睦子  
川上晃司  
吉永哀子
- 原一徳  
緒方 勝  
智識觀世  
上野 學  
池田 統  
松下 律  
關 和登  
石田新木  
上原絹代  
長面 賢
- 藤子  
睦子  
白華子  
良 平  
公 武  
統 統  
學 統  
和 登  
賢 賢  
淑 子

見る。讀者諸志の御鑑 實らんことを。  
鐘樓はまだ明けやらす朝の露  
湯の町の驛はかななりお茶の花  
寒さびし影亂さる庭の樹々  
神楽地場の黄昏に消えて鳴る  
釣人ののこせし焚火暮れはじむ  
かくて暮色漸く濃くな 進を誓ひつゝ散會した  
らんとする時お互の精  
(文藝部)

寺田白山  
若松先生  
石橋春子  
今井杜康  
白石史史

家庭計器  
大鉢他  
贈答用品  
特價品多數出品御利用下さい  
向田町十文字

合資會社  
丸三洋行  
川内分所 社長 松下盛光  
工場長 小幡安男

復歸開院  
上村醫院  
川内市大小路町  
舊川内高女校門前  
電話二二番

若松耳鼻咽喉科  
院長 江川 久男  
川内市向田町大橋橋  
(市民館隣り)

荒井齒科醫院  
院長 荒井 徹  
齒科醫 永濱 重明  
川内市驛前通り

天辰齒科醫院  
川内市向田町  
市民館裏

謹賀新年  
今年もどうぞ  
K.K.S.S  
各種インキ  
ライントポラ

オノハラ屋

文藝雜誌「棕櫚」原稿募集  
規定 1 論文 小説、創作、隨筆  
(一万字以内八百字迄)  
2 短歌 俳句 詩(一人三連以内)  
3 締切 一月末日

家庭計器  
大鉢他  
贈答用品  
特價品多數出品御利用下さい  
向田町十文字

合資會社  
丸三洋行  
川内分所 社長 松下盛光  
工場長 小幡安男

復歸開院  
上村醫院  
川内市大小路町  
舊川内高女校門前  
電話二二番

若松耳鼻咽喉科  
院長 江川 久男  
川内市向田町大橋橋  
(市民館隣り)

荒井齒科醫院  
院長 荒井 徹  
齒科醫 永濱 重明  
川内市驛前通り

天辰齒科醫院  
川内市向田町  
市民館裏

謹賀新年  
今年もどうぞ  
K.K.S.S  
各種インキ  
ライントポラ

オノハラ屋

文藝雜誌「棕櫚」原稿募集  
規定 1 論文 小説、創作、隨筆  
(一万字以内八百字迄)  
2 短歌 俳句 詩(一人三連以内)  
3 締切 一月末日